

自尊感情の諸側面 III — 本来感・本来性 —

Facets of Self-Esteem III: Sense of Authenticity

卜部 明
URABE Akira

自尊感情は様々な観点から研究されているが、本稿では、「本来感」「本来性」をキーワードに国内の88研究を概観した。これらは過去15年ほどの間に行われたものであり、高い関心をもたれていることがわかる。また、約1/4は子どもたちを調査対象とした研究であった。伊藤・小玉(2005a)による本来感尺度が最も多く使われていた。様々な変数との関連が調べられているが、被受容感、親子関係をはじめ、過剰適応や葛藤解決などを含め、広義の対人関係に関するものが多かった。自尊感情と同様、多くの要因との間で相互に影響し、結果となり原因になることが示されている。精神的健康や適応との関連が指摘されているが、その形成、発達、維持のプロセスを明らかにすることは今後の課題である。

キーワード：本来感、本来性、本当の自尊感情

I はじめに

自尊感情は心理学のテーマとして人気のあるものの一つであり、これまでに多数の研究が行われてきた。国内外の自尊感情研究において従来最も頻繁に用いられてきた尺度は Rosenberg (1965) の尺度である。Rosenberg は、自尊感情には「とても良い」と「これで良い」という2つの含意があるとしたうえで、前者よりも後者を重視した。後者では、自分の価値を感じて、自分を尊重する気持ちをもっており、自己受容しているが、必ずしも他者より優れているとは考えていない。そして、自らの尺度は後者を測定するものであるとしたが、果たしてそうであるかという批判的な見解が出されている (Kernis, 2003; 溝上, 1997)。

自尊感情はかつて、高低という軸で捉えられ、高い自尊感情は適応につながると考えられていた。だが、研究の進展により、自尊感情という概念を見直し、より洗練された分析を行う必要性が明らかとなった。

Kernis, Grannemann, & Barclay (1989) は、安定・不安定という軸を取り入れ、自尊感情が不安定で高い者が怒りや敵意を経験する傾向が最も高く、安定して高い者が最も低く、自尊感情が低い者はその中間であることを見出した。この研究は、自尊感情を新たな視点で捉えることの必要性を明確に示したといえる。

Deci & Ryan (1995) は、随伴性自尊感情 (contingent

self-esteem) と本当の自尊感情 (true self-esteem) という概念を提唱した。随伴性自尊感情は、「優れているというある一定の基準を満たすこと、あるいは対人的期待または精神的期待に沿うことの結果として生じる、実際、それ次第で決まるような自分自身に関する感情」(Deci & Ryan, p. 32) を指すものである。それに対して、本当の自尊感情は、「より安定的で、確かな自己感覚にしっかりと基づくもの」であり、「自分自身に対して忠実である人は、自分らしくあることによって高いレベルの本当の自尊感情をもつ」(Deci & Ryan, p. 32) とされる。そして、本当の自尊感情は肯定的な結果につながるが、随伴性自尊感情は必ずしもそうではないと考えられている。なお、Deci & Ryan は、操作的定義をしておらず、尺度も作成していない。

Kernis (2003) は、最良の自尊感情 (optimal self-esteem) を概念化し、それは、防衛的でなく、本当のものであり、安定していて、潜在的自尊感情と一致しているとする。そして、authenticity (本来性) は、optimal self-esteem の適応的な側面を描くうえで特に重要なものであり、個人の本当の、あるいは中核的な自己が機能することによって特徴づけられるとする。

伊藤・小玉 (2005a) は、authenticity の意味は、「本当の自分」「自分らしさ」という言葉で表現されるも

のとかなり重なると考え、sense of authenticity に本来感という訳語を与え、「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」と操作的に定義し、尺度を作成している。

伊藤・小玉 (2006a) によれば、本来感とは自分らしくある感覚を指し、本当の自尊感情は自分らしくあることによって自然と沸き起こる自己価値の感覚であり、厳密には区別される概念である。だが、現在のところ、本当の自尊感情の指標として本来感が用いられ、多くの研究が行われている。本稿では、わが国で行われた本来感に関する研究を概観したい。文献の検索は「本来感」「本来性」をキーワードとして CiNii、J-STAGE で行った。

II 本来感・本来性尺度

伊藤・小玉 (2005a) は、sense of authenticity に「本来感」という訳語を与え、尺度を作成した。この尺度は、7項目1因子からなる。Rosenberg (1965) の自尊感情尺度と、 $r=.73$ の相関がみられたが、確認的因子分析を行い、本来感と自尊感情は高い相関関係にあるが、それぞれ異なった因子として捉えられるとしている。

Kernis & Goldman (2006) は、45項目から構成された尺度を作成している。本邦では伊藤・阿部 (2007) が翻訳し、本来性目録としている。これは本来性を内的・外的な行動から捉えるもので、自分の感情に気づいていられること (気づき)、感情や認知を歪めずに処理すること (歪みのない処理)、自身の意思に率直に行動すること (行動)、親密な関係で自分を偽らずにいられること (関係) の4側面から構成されている。なお、藤元 (2014) が確認的因子分析を行った結果、5因子が妥当と判断されている。

Wood, Linley, Maltby, Baliousis, & Joseph (2008) による本来性尺度は12項目で、石川・菅原・加部・根岸 (2014) が翻訳している。「自己疎外感」「他者影響感」「本来的自己感」の3因子から構成されている。内容は抽象的な事柄、個人の実在的な存在の意味を問うものである。

今回収集した88研究の中では、伊藤・小玉 (2005a) の尺度を用いた研究が多く、一部修正を加えたものも含めて、71研究で使用されていた。その他、Kernis & Goldman (2006) および Wood et al. (2008) の尺度を用いたものが各1研究あった。また、居場所感尺度を用いた研究があったが、それらは居場所感の下位尺度として「本来感」を含むものであった。

III 本来感・本来性研究

本来感とは、自分らしさの感覚であるが、自分らしくあることが可能になるためには、周りの人との関係が大きく影響する。被受容感や親子関係をはじめ、過剰適応、葛藤解決スキルなども含め、広義の対人関係との関わりを調べている研究が多数ある。また、自分らしくあることは居場所感の要因として重要なものであり、複数の対象者、場所についての居場所感研究がある。そして、本来感とは適応と関わると考えられており、学校適応、ストレス、well-being などとの関連が検討されている。またそれ以外にも様々な変数との関連が調べられている。以下、研究結果をみていきたい(注)。

調査対象

今回収集した研究の調査対象者の内訳は、小学生4、中学生14、高校生5、大学生56、成人11であった(一部重複している)。

発達的变化・性差

発達の変化および性差に関しては、以下のような結果がみられている。野原・深見 (2018) では小学校5年生6年生を対象にしたが、学年差はみられなかった。折笠・庄司 (2010) では中学生の学年差はなかったが、折笠・庄司 (2018) では中学2年生3年生は1年生より高く、2年生が3年生よりも高かった。石本 (2010a) では中学生より大学生の方が高かった。益子 (2011) は高校生から成人 (60歳まで) を4群に分け比較しているが、本来感とは、高校生より成人の方が高かった。

小学校高学年 (野原・深見, 2018) では性差はなかった。中学生は調査によって、男子の方が高いという性差がみられたものと、差がないという結果があったが (折笠・庄司, 2010; 折笠・庄司, 2018)、大学生では性差がみられ、男子の方が高かった (市毛・大河原, 2009; 白田, 2020)。

対人関係

原澤 (2017) は大学生を対象に、石原 (2013) は中学生から大学生を対象に、家族・友人・先生の3者からの被受容感が高い群は本来感が高いことを見出している。

石原 (2020) は、被受容感および自己受容が本来感に正の影響を与え、本来感とは主観的幸福感に正の、抑うつ感に負の影響を与えることを見出している。

山田・吉澤 (2017) は、中学生を対象に、教師・保

護者・友人の働きかけの影響を検討している。働きかけの「受容・配慮」、教師と保護者の「統制指導」、友人の「肯定的フィードバック」が本来感に影響し、本来感は心理的 well-being に影響していた。

鈴木・小川 (2008) は、中学生を対象に、自尊心と被受容感の高低によって4群に分けた結果、本来感は、高群高群>高群低群・低群高群>低群低群であった。

田中・下田 (2013) は、中学生を対象に、友人に対する感情との関連を検討している。男女ともに本来感が友人に対する信頼・安定を高め、男子は本来感が友人に対する独立を高め、女子は友人に対する葛藤が本来感を低めることを見出している。

伊藤・小玉 (2006b) では、男女ともに自分を表現する対人的関わりは本来感と正の関連にあり、「閉鎖性・防衛性」「他者依拠」は負の関連があった。他者に対して積極的に優しく接しようとする「他者受容」は、男性では正の関連がみられたが、女性では関連がみられなかった。

足立 (2017) は、いじりの受け止め方を3群に分け(無関心群、不快群、受け止め群)、本来感を比較したところ、無関心群>受け止め群という結果であった。

赤川・下田・石津 (2016) は、中学生を対象とし、3ヶ月間隔で2度の調査を行い、友人関係や学校適応感との関連を検討した。男子では、自己価値の随伴性から本来感に負の、本来感から評価懸念、自己価値の随伴性、学校適応感に負の影響がみられた。女子では、本来感から評価懸念と自己価値の随伴性に負の影響がみられた。

松井・岩崎・五十嵐 (2017) は、対人不安傾向が低い群ほど本来感が高いことを見出している。

折笠・庄司 (2018) は、中学生を対象とし、本来感といい子傾向との関連を調べ、「他者迎合」とは正の、「主張抑制」とは負の相関がみられた。

松並 (2020) は、高校生を対象に、依存的恋愛観の要因について調べた結果、女子では、本来感から「仲間集団への依存」へ負の、さらにそこから「依存的恋愛観」へ正の影響がみられた。

伊藤・川崎・小玉 (2011) では、本来感は対人関係や生き方などの自尊源での充足感と正の相関がみられた。

親子関係

市毛・大河原 (2009) では、男女とも学校・社会場面でよい子願望を受けると随伴性が高くなり、男性で

はネガティブな感情表出の抑制を求められると随伴性が低くなり、男女ともに随伴性は本来感に負の影響を与えていた。

齋藤 (2010) は、母子関係3因子(「信頼・承認」「頼る」「支援」)それぞれの高低によって本来感に差があるか調べたところ、女性では、「信頼・承認」および「支援」高群の方が本来感が高かった。

寺嶋・吉岡 (2017) では、母親による情緒的サポート(「承認」「援助」)が母親に対する安心感を生み、それが母娘の絆につながり、さらに娘の本来感を高めるという結果であった。本来感は、「いい子」であることに負の影響を与えていた。

過剰適応

益子 (2009) では、過剰適応尺度(「期待に沿う努力」「自己抑制」「他者配慮」)のうち、「期待に沿う努力」「自己抑制」は本来感に負の影響を与えていた。

益子 (2010) では、過剰適応尺度(「よく思われたい欲求」「自己抑制」「他者配慮」)のうち、「よく思われたい欲求」「自己抑制」が本来感に負の影響を与え、また内省傾向は本来感に正の影響を与えていた。

益子 (2011) では、過剰な外的適応行動と本来感、負の相関を示したが、年齢が上がると(高校生から60歳までの4群で比較)その関連は弱くなった。

益子 (2016a) は、クラスター分析により適応様式の4タイプを抽出した。「他者志向」と「自己抑制」がともに低いタイプおよび「他者志向」タイプは、「自己抑制」タイプおよび両者が高いタイプより、本来感が高かった。

今村 (2021) では、過剰適応の内的側面である「自己抑制」および「自己不全感」、自己価値の随伴性、特性不安が本来感に負の影響を与えていた。また、過剰適応の外的側面(「期待に沿う努力」「人からよく思われたい欲求」「他者配慮」)の高低に関わらず、内的側面が低い群の方が本来感が高かった。

吉成・石村 (2019) は、過剰に周囲に合わせる「過剰同調性」との関連を検討している。過剰同調性からネガティブ感情表出に負の、ネガティブ感情表出から被受容感に正の、被受容感から本来感に正の影響がみられた。

藤元 (2013) では、本来感から過剰適応尺度5因子のうちの「自己不全感」「自己抑制」に負の影響がみられ、学校適応に正の影響がみられた。

藤元・吉良 (2014) では、過剰適応低群では、本来性から過剰適応の外的適応行動(「よく思われたい欲

求」「自己犠牲的他者配慮」を低減させる影響がみられ、過剰適応高群では、本来性から過剰適応の内的適応「自己抑制」「自己不全感」を低減させる影響がみられた。

牛山(2015)では、過剰な外的適応行動のうち「よく思われたい欲求」「自己抑制」は本来感に負の影響を、成功の自己認識のうち「肯定的自己評価」「柔軟な思考」は本来感に正の影響を与えていた。

葛藤解決

益子(2013)では、統合的葛藤解決スキルは本来感に正の、過剰適応を示す「関係維持・対立回避的行動」は本来感に負の影響を与えていた。

益子(2016a)では、統合的葛藤スキル高群は低群より本来感が高かった。

益子(2016b)は、大学生を対象に、統合的葛藤解決スキルの向上を目指す4回の心理教育プログラムを実施しているが、その結果、本来感得点が上昇していた。

益子(2018)では、3ヶ月の期間を空けて2度調査した結果、統合的葛藤スキルはTime 1の本来感に正の影響を与えていた。

上野・赤澤・松並・井ノ崎・下村(2021)は、葛藤解決方略が「暴力行為被害」と「被支配感」に影響し、さらに本来感を損なうというモデルを検討した。女性では「支配方略」が「暴力行為被害」に正の、「暴力行為被害」が「被支配感」に正の、「被支配感」が本来感に負の影響を与えていた。男性では、本来感への影響はみられなかった。

居場所感

石本(2010a)では、中学生において居場所感(「自己有用感」「本来感」)が自己肯定意識の様々な側面に影響し、学校適応に影響していることが示された。中学生・大学生ともに居場所感が高いほど心理的適応が高くなることが示唆された。年齢、性別ごとに居場所として重要となる対人関係の種類が異なることが示された。

川原(2020)は、現実生活における本来感がアパシー傾向に負の影響を与え、アパシー傾向からネット依存傾向に正の影響がみられた。

小野田・吉岡(2014)は、本来感を家庭における居場所感の1因子として調査した結果、中学生・高校生ともに自己肯定意識(対自己領域および対他者領域)が高いほど、そして友人に対する相互依存的甘えが高

いほど、本来感が高かった。

三島・林・森(2011)は、「本来感」「役割感」「共感性」の3因子からなる教育実習生の居場所感尺度を作成した。女性の本来感の実習後に高くなり、それは男性より高かった。インフォーマルな場面での親和経験が実習前後の本来感の変容に影響していた。男性において本来感教師効力感の「学級経営・管理」の変容に影響していた。

中村・岡田(2016)は、「役割感」「安心感」「本来感」の3因子からなる職業生活における心理的居場所尺度を作成した。仕事要因に関する6変数からの影響を調べたところ、本来感に対しては「仕事の評価」「仕事のやりがい」「職場への適応」が正の影響を与えていた。

萩野・小澤(2020)では、2年目看護師において、先輩や同期看護師からの情緒的サポートと自己効力感が居場所感(「自己有用感」「本来感」)に正の影響を与え、さらに、患者ケアの提案などにおける報告・相談行動に影響していた。

山口・松壽・上村(2021)では、援助要請が居場所感(「本来感」「自己有用感」)を介して、QOLに正の影響を与えていた。

石本(2010b)では、社会的居場所(他者として居場所を感じる)が得られていることと本来感に有意な相関がみられたが、個人的居場所(一人でいて居場所を感じる)とは関連がみられなかった。

学校

松崎(2012)では、小学生を対象とし、Q-U満足群出現率が高い学級ほど本来感の平均値は高く、かつ標準偏差は小さくなる傾向があった。本来感へのQ-U因子の影響については学校および満足群出現率による違いがみられた。

松崎(2013)では、小学生を対象とし、Q-U満足群出現率によって違いがあるが、全体としては、学級機能3因子のうち、「有能感・貢献感」は本来感に直接影響し、「教師の関わり」は「有能感・貢献感」を介して間接的に本来感に影響していたが、「集団凝集性」は影響がみられなかった。

野原・深見(2018)では、小学生を対象とし、学級雰囲気尺度得点により高群・中群・低群に分けたところ、本来感は高群>中群>低群であった。また、本来感と学習意欲には正の相関がみられた。

折笠・庄司(2010)では、中学生を対象としたが、本来感学級間に差がみられた。本来感高群・低群と比較すると、自己肯定感、コンピテンス、自尊感情、

学級満足度に有意差がみられた。

折笠・庄司(2012)では、中学生を対象とし、本来感と自尊感情、自己肯定感、コンピテンスの間には正の相関がみられた。また、本来感は学級満足度(「承認」「被侵害」)に影響を与えていた。

折笠・庄司(2019a)では、中学生を対象とし、本来感は学校ストレス(「教師の無配慮」「友人からの侵害」「学業に自信なし」)に負の影響を与え、学校ストレスは学校忌避的感情に正の影響を与えていた。また、本来感は直接学校忌避的感情に負の影響を与えていた。

折笠・庄司(2019b)では、中学生を対象とし、優越感と本来感の高低により4群を設定して、「いい子傾向」「社会的スキル」「学校適応感」を従属変数として分析した。本来感が低いと学校適応感が低かった。また、優越感と本来感のどちらも高い群が、社会的スキルが高く、学校適応感も4群の中で最も高かった。

ストレス

伊藤・小玉(2005b)では、本来感は、「抑うつ・不安感情」「身体的反応」「無力的認知・思考」を低減させるが、「不機嫌・怒り感情」には影響していなかった。また、本来感は、問題焦点対処や情緒焦点対処と正の相関がみられたが、援助要請対処や逃避的対処とは関連がみられなかった。

福井・成瀬(2015)では、本来感は、情動的ストレス反応と認知行動的ストレス反応に直接効果をもつとともに、「見捨てられ不安」「親密性の回避」を媒介した間接効果をもっていた。本来感希求は、「親密性の回避」を媒介して認知行動的ストレスと身体的ストレスへの間接効果を示した。

渡曾(2018)では、高校生を対象とし、本来感の高低2群の比較をした結果、本来感高群は低群に比べ、情動反応やストレス反応が低かった。また、低群は高群に比べ「逃避的」コーピングを多く使い、高群は低群に比べ「問題焦点」コーピングと「情動焦点」コーピングを多く使っていた。そして、高群は低群に比べ多くのソーシャルサポートを受けていると認知していた。

well-being

伊藤・小玉(2005a)では、本来感と自尊感情は主観的幸福感と心理的 well-being に対してともに正の影響を与えていたが、well-being の下位因子でみると、それぞれの影響には違いがみられた。

白田(2020)では、本来感に対して認知より情動が強い影響を及ぼしていた。本来感高群の方が、心理的 well-being が高い傾向がみられた。また、本来感高群と低群では、情動および認知が心理的 well-being に与える影響に違いがみられた。

大田・増田・上手(2021)では、本来感は優越感よりも心理的 well-being に対して重要であることが示された。

保育士・幼稚園教諭

吉田・田島(2010)は、保育専攻学生を対象に調査した結果、対人コミュニケーションがうまくいったという認知が本来感を媒介し、保育職に向いているという適正感やなりたいたいという志向感に正の影響を与えていた。

前田(2017)は、保育実習前後で調査を行った結果、実習前後を通じて、本来感が高い学生は低い学生より保育者効力感が高かった。

折笠(2016a)は、幼稚園教諭のピリーフ4因子について検討した結果、社会的に価値のある仕事であるなど「社会的価値」は本来感に正の影響を与えていた。

折笠(2016b)は、幼稚園教諭志望の学生のピリーフ4因子について検討した結果、親代わりの存在として接することが大事など「母親代行」は本来感に正の影響を与えていた。

折笠(2021)では、保育職従事者の共同体感覚と本来感との関連を調べ、有意な相関を見出している。

職業関連

松田チャップマン・石川(2019)では、ダイバーシティ&インクルージョン風土は、心理的両性具有性に正の影響を与え、さらに本来感を向上させ、そしてワーク・エンゲージメントを促進し、抑うつ感を抑制することが示された。

光岡(2019)では、看護師を対象とした調査を行い、本来感は「職業的アイデンティティ」と「深層演技に伴う感情労働」に正の影響を与え、経験年数から正の影響を受けていた。

向日(2019)では、一般的な本来感と職場における本来感を分けて調査を行った結果、一般本来感は、自律的動機に正の影響を与えていた。職場本来感は、自律的動機と他律的動機のいずれにも正の影響を与えていた。

阪無・石村(2015)では、一時保護所職員を対象に、「児童への共感・ポジティブな感情表出」は「個人的

達成感」に影響し、本来感を媒介することで、バーンアウト3因子に影響していた。

稲垣(2019)は、大学生を対象に、個人のダイバーシティ開発を促すワークショップ形式の授業を5回行った。その結果、本来感は有意に上昇した。

アスリート学生

江田・伊藤・杉江(2009)は、アスリート学生と非アスリート学生を対象に調査をした結果、全ての学生で本来感 は GHQ の 4 下位尺度(「身体症状」「不安と不眠」「社会的活動障害」「うつ傾向」)に負の影響を与えていた。

小林・水上(2019)は、柔道と陸上競技を行っている学生を対象としてスポーツ障害の発生に関する要因を調査した結果、非受傷群・軽症群・重症群に分けると、柔道の軽症群で本来感がリスクを低下させていた。

ASD

土田(2019a)では、本来感 は、アスリート学生の方が非アスリート学生よりも高く、また ASD(自閉スペクトラム症)傾向の低い学生の方が高い学生より高かった。

土田(2019b)では、本来感に対して強い総合効果を示したのは、ASD 傾向高群では、友人サポートおよび肯定的自動思考、その他の群では、エゴ・レジリエンスと肯定的自動思考であった。

土田(2020)では、ASD 傾向が高い学生は、ハーディネス下位尺度「コントロール」(例、頑張れば目標は達成する)から本来感に影響がみられた。ASD 傾向が低い場合、アスリート学生ではハーディネス下位尺度「チャレンジ」(例、色々なことをしてみたい)から正の、非アスリート学生では「心理的敏感さ」から負の影響がみられた。

アート

佐々・原田(2018)は、描画に現れる学校イメージを検討しているが、描画全体の印象により「動的」「静的」に分けたところ、「動的」な描画を行った群の方が本来感 は高かった。

今枝(2015)では、3回のコラージュ制作および自己像への着目の有無による本来感の違いを調べたが、違いはなかった。

今枝(2016)では、3回のコラージュ制作を行ったが、本来感上昇者は、目の前の作品に没頭し自由な制

作ができていたのではないかと推察された。

今枝(2019)では、3回のコラージュ制作の前後で本来感に違いはなかった。

マインドフルネス

相馬・越川(2013)は、育児期の母親にマインドフルネス・ヨガを実施したが、その前後で本来感 が上昇していた。

中谷・東山(2019)では、本来感 は、マインドフルネス尺度得点および日常的フォーカシング態度尺度得点と有意な相関がみられた。

自己意識・認知

佐々木・池上(2016)は、Self-Discrepancy Theory の枠組みから検討し、現実自己が理想自己と義務自己の両方を達成しているときに本来感 は高まるという結果を得ている。

伊藤・小玉(2006a)では、本来感 は自律性、可能性追求意識、現状改善意識など主体的な自己形成に関わる変数に正の影響を与えていた。

鈴木・中村(2015)では、大学生の自分探しに影響する要因を検討したが、自己違和感や自己開拓意識に対して本来感の影響はみられなかった。

黒山・下田(2013)では、男女ともに「肯定的思考」は直接本来感に影響するとともに、「社会的主張」を介して影響していた。男性では「将来否定」が、女性では「自己否定」が本来感に負の影響を与えていた。また男性では「自己非難」が「身体制御不能」を介して影響していた。

織田(2018)では、過去の捉え方の4つのタイプのうち、最も過去に対して否定的な認識をもっているタイプは、本来感、充実感、自尊感情が最も低かった。

沼田(2019)では、本来感に対し、「省察」からは正の、「反芻」からは負の影響がみられた。本来感から「他者へのゆるし傾向」と「自己への積極的ゆるし傾向」に正の影響がみられた。

酒井・川崎(2018)では、30日間振り返り日記を記述した前後で本来感 が上昇していた。

その他

大田・増田・上手(2021)は面接調査を行い、本来感の形成要因とプロセスを検討している。「素の自分に関心を向けた関わり」「一貫した自分らしさを形成すること」「自己の内面に葛藤すること」「固執した信念の“とらわれ”から抜け出すこと」など4つの要因

と大学生に至るまでに3つの年齢段階が形成プロセスに存在すると分析している。

川上(2020)は、面接調査により、自分らしくあることが経験の中でどのように体験されてきたかを検討している。自分の見つけ方は人によって違いがあるが、特定の他者との関係性を通して「本来の私」が体感されるとしている。

長峯・外山(2019)では、ノスタルジア(ある過去の出来事を懐かしく感じ、感傷的な気持ちになること)の喚起によって本来性が高まることで未来に対する態度が形成されるというプロセスが示唆された。

永瀬(2018)では、命の意味づけや母性意識に関する因子と本来性に正の相関がみられた。誕生や死に関わった経験の有無によって本来性に違いはなかった。

清水・鄭・浦上・清水・杉村(2014)では、親性準備性尺度を作成しパーソナリティ特性との関連を調べたが、男性では本来感と自尊心が、女性では自尊心が親性準備性と正の相関を示した。

牧山(2011)では、本来感は、首尾一貫感覚(sense of coherence)とソーシャルサポートを介して、しょうがい児の親のQOLに正の影響を与えていた。

尾崎・小林・奥(2006)は、健康的なスピリチュアリティ、本来感、フローの間に有意な相関を見出している。

Ⅳ まとめにかえて

今回収集した研究は88研究であった。卜部(2020, 2021)が、状態自尊感情、自尊感情の安定性、潜在的自尊感情をキーワードに検索を行い、国内の研究を概観しているが、それらと比較すると研究の数が多い。本来感が高い関心をもたれていることがわかる。その理由として、本来感が本当の自尊感情の指標として扱われていること、そして伊藤・小玉(2005a)による尺度を用いた測定が容易であることが挙げられるであろう。

自尊感情は非常に沢山の研究が行われてきたが、自尊感情という概念が新たな観点から捉えられるようになり、最も使用されてきたRosenberg(1965)の尺度に関する疑問が出されるようになった。これらを背景として、Deci & Ryan(1995)の提唱した本当の自尊感情、Kernis(2003)による最良の自尊感情が注目されることとなり、その結果として本来感が取り上げられることが増えていると考えられる。

また、多くの研究で用いられている伊藤・小玉(2005a)による7項目の本来感尺度は実施も容易であ

る。Kernis & Goldman(2006)の尺度は45項目である。実施が容易であることは、メリットとなる。自尊感情研究の一つの観点として安定性があるが、安定性を測定するためには繰り返し尺度に回答してもらうことが必要となり、時間と手間がかかる。潜在的自尊感情研究で最も使用されているIAT(Implicit Association Test)は、紙筆版も開発されているが、もともとパソコンを使うものである。それらと比較すると、7項目の本来感尺度は使いやすい。

調査対象者の内訳をみると、小学生から高校生までで全体の約1/4であった。自尊感情の安定性や潜在的自尊感情などと比較すると、子どもたちが対象となった研究の割合が多いといえる。ここにも尺度使用の容易さが影響していると思われるが、それだけではないであろう。自尊感情や自己肯定感という言葉は教育分野でもしばしば使われるものであり、教師や保護者の関心は高い。そのことの反映であると思われる。適応とも関連すると考えられている本来感は、教育関係者にとっても興味深いものである。

自尊感情は思春期に低下し、その後、上昇すること、思春期に性差が生じるが、それは女子の低下が男子より大きいためであることなどがわかっている(Robins & Trzesniewski, 2005; 卜部, 2017; Zeigler-Hill & Myers, 2013)。今回収集した研究の中で、発達的变化や性差に言及したものは少ない。発達的变化については、中学生の学年差に関しては、調査によって結果が異なっていた(折笠・庄司, 2010; 折笠・庄司, 2018)。また、中学生より大学生の方が高く(石本, 2010a)、高校生より成人の方が高い(益子, 2011)という結果がみられたが、生涯を通しての変化についてはわからない。また性差については、小学校高学年では差がなかったが(野原・深見, 2018)、中学生では調査によって結果は異なり(折笠・庄司, 2010; 折笠・庄司, 2018)、大学生では性差がみられている(市毛・大河原, 2009; 白田, 2020)。Ito, Horikoshi, & Kodama(2009)は、963名(平均年齢51.5歳)を対象に調査を行い、本来感は年齢とともに増加の傾向があり、女性よりも男性の方がわずかに高いという結果が示されている(伊藤, 2010)。本来感に自尊感情と同様の発達的变化や性差がみられるのかどうかについては今後の検討が必要である。

自尊感情にはコンピテンスと価値という2つの側面があるといわれてきた(Pyszczynski & Kesebir, 2013)。James(1890)は、自尊感情を願望に対する成功の割合と定義したが、これはコンピテンスに関わるもので

ある。また、象徴的相互作用理論では、子どもは、重要な他者が自分をみるように、自分自身を捉えるようになる」と説明されているが (Felson, 1989)、これは自己価値に関わるものである。

伊藤・小玉 (2006a) は、随伴性自尊感情と本当の自尊感情の区別は、自尊感情を社会的基準上での「とてもいい」という感情と、個人的基準上での「これでいい」という感情とに分ける見解 (Rosenberg, 1965) に端を発すると思われると述べている。随伴性自尊感情はコンピテンスと、本当の自尊感情は自己価値と関わると考えられる。

対人関係には様々な側面が含まれるが、重要な他者との関係性、特に受容的関わりは本来感にとって不可欠な要因と考えられる。今回収集した中でも5つの研究で被受容感が扱われている。誰から受容されることが本来感の形成、維持にとって重要であるのかは年齢によっても異なる可能性がある。また、本来感に影響を与える関わりは受容だけであろうか。それは、本来感はどのようにして形成され、発達し、維持されるのかというテーマにつながる。

今回の研究の中では、大田・増田・上手 (2021) がインタビューによって本来感の形成要因とそのプロセスを検討している。大学生を対象とし、幼少期から現在までの本来感の変化について説明を求め、分析したものである。複線径路・等至性モデル (TEM) による分析は、形成、発達、維持のプロセスについて考察するうえで、示唆を与えるものといえよう。

対人関係に関しては、そのあり様が本来感に影響するだけでなく、本来感が対人関係に影響もする (田中・下田, 2013; 松並, 2020)。学校生活に関しても、松崎 (2012, 2013)、野原・深見 (2018) では、学級のあり様が本来感に影響することが示されているが、折笠・庄司 (2019a) では、本来感から学校ストレスや学校忌避感情への影響が示されている。ここでも、本来感に影響を受けつつ、影響を与える要因となっている。

自尊感情には、生物・心理・社会的要因が相互にダイナミックな影響を与えていると考えられる (Robins & Trzesniewski, 2005)。すなわち、自尊感情は原因にも結果にもなるということである。その点では、本来感も同様であることは今回収集した研究によっても明らかである。

益子 (2009, 2010)、牛山 (2015) では、過剰適応から本来感への影響が示されているが、藤元 (2013)、藤元・吉良 (2014) では、本来感あるいは本来性から、

過剰適応や学校適応に対する影響が示されている。いずれの研究も共分散構造分析を行っている。本来感の測定尺度は、益子 (2009, 2010)、牛山 (2015)、藤元 (2013) では、伊藤・小玉 (2005a) の本来感尺度、藤元・吉良 (2014) では、Kernis & Goldman (2006) による本来性目録を用いている。また、過剰適応尺度は、いずれの研究も石津・安保 (2008) による尺度をもとにしているが、一部項目を削除した研究もあり、因子数は3因子から5因子までと異なっている。

測定尺度が異なれば、測定されているものは同一ではないと考えられるが、ここでは全てではないが同じ尺度が用いられている。そして、過剰適応と本来感との間で、因果の方向性が逆の結果がみられている。このことはどのように説明できるのであろうか。他の変数でも同様の結果はあり得るのか。これは興味深い疑問である。

対象者の異なる居場所感尺度が複数作成されている。それぞれの尺度を構成する因子には違いがあるが、本来感共通しており、居場所感を考えるとき、本来感が重要な要素であることがわかる。一方で、小学生用の居場所感尺度を作成した西中 (2014) は、本来感を含む5因子を想定していたが、因子分析の結果、本来感因子として抽出されなかった。今後さらに検討が必要だが、本来感の形成、発達に関わることもかもしれない。

石本 (2010b) で、社会的居場所が得られていることと本来感に相関がみられたが、個人的居場所とは関連がなかったことは興味深い。社会的居場所とは、他者として居場所が得られている感覚を指す。関係性の中でありのままにいられることが居場所として重要であり (石本, 2010a)、それは本来感にも関わることを示すものである。なお、この社会的居場所は、本来感だけでなく、自己有用感や心理的 well-being とも相関がみられている。

自尊感情は、特性自尊感情と状態自尊感情に分けて捉えられており、尺度も作成されている。日々の生活の中で、自尊感情は動くものであるということが前提になっている。本来感に関して、特性と状態を区別する必要はあるのだろうか。自分らしくあると感じられることは、状況に依存するところがあると考えられる。つまり、自尊感情と同様に、ある程度、変動するものではないだろうか。そうであるならば、特性と状態に分けて考えることや、その変動の仕方、安定性についても考える必要があるかもしれない。

本来感は、適応に関わるものと考えられており、今

後も数多くの研究が行われると予想される。非常に多くの要因と関連すると予測されるが、だからこそ、しっかりとした理論的根拠をもとに研究が蓄積され、精神的健康や適応に貢献できる知見が得られることを期待したい。

注：各研究の中では様々な変数が取り上げられているが、本稿においては、本来感と関連のみられた変数について言及している。また、自尊感情、自尊心の使い分けは、もとの論文に従うこととする。

<文献>

足立裕樹 (2017) いじりに対する受け止め方によるタイプ分類について：自尊心・友人関係満足度・本来感の関連、九州産業大学大学院臨床心理センター臨床心理学論集、12、21-26。

赤川果奈・下田芳幸・石津憲一郎 (2016) 中学生の友人関係、自尊感情及び学校適応感の相互影響性、富山大学人間発達科学部紀要、10 (2)、1-10。

Deci, E. L. & Ryan, R. M. (1995) Human autonomy: The basis for true self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem* (pp. 31-50). New York: Plenum.

江田香織・伊藤正哉・杉江征 (2009) 大学生アスリートの自己形成における本来感と随伴的自己価値が精神的健康に及ぼす影響、スポーツ心理学研究、36 (1)、37-47。

Felson, R. B. (1989) Parents and the reflected appraisal process: A longitudinal analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 965-971.

藤元慎太郎 (2013) 青年期における自尊感情が適応感に与える影響—自己価値の随伴性と本来感の視点から—、別府大学臨床心理研究、8・9、22-30。

藤元慎太郎 (2014) 本来性尺度の信頼性・妥当性の検討、日本心理学会第78回大会発表論文集、337。

藤元慎太郎・吉良安之 (2014) 青年期における過剰適応と自尊感情の研究、九州大学心理学研究、15、19-28。

福井義一・成瀬友貴美 (2015) 「自分らしくあること」(本来感)と「それを目指すこと」(本来感希求)がストレス反応に及ぼす影響：規定因としての成人愛着の検討、甲南大学紀要文学編、165、199-209。

萩野美穂・小澤三枝子 (2020) 新卒看護師・2年目看護師の病棟における報告・相談活動に影響する要因、日本看護管理学会誌、24 (1)、141-153。

原澤奈美 (2017) 女子大生の自己受容および本来感と周囲の他者からの被受容感の関連、日本女子大学大学院人間社会研究科紀要、23、117-138。

市毛陸・大河原美以 (2009) 親のよい子願望が子どもの自尊感情に与える影響—親への依存欲求・独立欲求に注目して、東京学芸大学紀要総合教育科学系、60、149-158。

今枝美幸 (2015) 継続的コラージュ制作における自己像への着目と本来感の関連：気分変容と体験過程の検討、金城学院大学大学院人間生活学研究所論集、15、1-10。

今枝美幸 (2016) コラージュ制作における自己像への着目と体験過程の検討—本来感との関連—、コラージュ療法学研究、7 (1)、17-27。

今枝美幸 (2019) 継続的コラージュ制作における認知物語アプローチの導入：本来感・体験過程の検討、金城学院大学大学院人間生活学研究所論集、19、13-21。

今村政彦 (2021) 大学生における過剰適応と本来感・不安に関する研究、創価大学大学院紀要、42、203-221。

稲垣久美子 (2019) 個人のダイバーシティ開発を促す授業実践、経済教育、38、39-42。

石津憲一郎・安保英勇 (2008) 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響、教育心理学研究、56、23-31。

石原由美 (2013) 思春期・青年期における周囲の他者からの被受容感と自己の「本来感」との関連、九州大学大学院人間環境学研究院紀要、14、117-124。

石原由梨奈 (2020) 受容的認知及び自尊感情が主観的幸福感に及ぼす影響—自尊感情の随伴性に注目して—、甲南女子大学大学院論集、18、23-32。

石川清子・菅原嗣一・加部千尋・根岸良太 (2014) 日本語版本来性尺度の検討、日本心理学会第78回大会論文集、1021。

石本雄真 (2010a) 青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響、発達心理学研究、21 (3)、278-286。

石本雄真 (2010b) こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所—精神的健康および本来感、自己有用感との関連から—、カウンセリング研究、43、72-78。

伊藤正哉 (2010) 本来性研究の発展とポジティブ心理学、現代のエスプリ、512、100-108。

伊藤正哉・阿部美帆 (2007) 本来性 (Authenticity) の行動的側面と感覚的側面の関係、日本心理学会第71回大会論文集。

Ito, M., Horikoshi, M., & Kodama, M. (2009) A cross-sectional survey of age and sense of authenticity among Japanese. *Psychological Reports*, 105, 575-581.

伊藤正哉・川崎直樹・小玉正博 (2011) 自尊感情の3様態—自尊源の随伴性と充足感からの整理—、心理学研究、81 (6)、560-568。

伊藤正哉・小玉正博 (2005a) 自分らしくある感覚 (本来感)

- と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討、教育心理学研究、53、74-85.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005b) 自分らしくある感覚(本来感)とストレス反応、およびその対処行動との関係、健康心理学研究、18 (1)、24-34.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2006a) 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討—本来感、自尊感情ならびにその随伴性に注目して—、教育心理学研究、54、222-232.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2006b) 自分らしくある感覚(本来感)に関わる日常生活習慣・活動と対人関係性の検討、健康心理学研究、19 (2)、36-43.
- James, W. (1890) The principles of psychology. New York: Holt.
- 川原正人 (2020) 大学生における居場所感とアパシー傾向が依存傾向にもたらす影響、東京未来大学研究紀要、14、37-44.
- 川上りか (2020) 本来感の探索的研究：インタビュー調査を通して、龍谷大学大学院文学研究科紀要、42、89-111.
- Kernis, M. H. (2003) Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14 (1), 1-26.
- Kernis, M. H. & Goldman, B. M. (2006) A multicomponent conceptualization of authenticity: Theory and Research. *Advances in Experimental Social Psychology*, 38, 283-357.
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989) Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 1013-1023.
- 小林好信・水上勝義 (2019) 大学生アスリートにおけるスポーツ障害の発生に関連する心理社会的要因の縦断的研究—種目と重症度による違いからの検討—、運動疫学研究、21 (2)、148-159.
- 黒山竜太・下田芳幸 (2013) 自動思考と自己主体感が精神的健康に及ぼす影響、長崎国際大学論叢、13、21-29.
- 前田有秀 (2017) 保育専攻生における保育実習経験の効果に関する研究：保育者効力感変化に影響を与える事前要因の検討、尚絅学院大学紀要、73、42-54.
- 牧山布美 (2011) しょうがい児を育てる親の QOL モデルの検証、川崎医療福祉学会誌、20 (2)、357-364.
- 益子洋人 (2009) 青年期における過剰適応傾向に関する研究—外的適応行動と自己価値の随伴性、本来感との関連—、文学研究論集、30、243-251.
- 益子洋人 (2010) 大学生の過剰な外的適応行動と内省傾向が本来感におよぼす影響、学校メンタルヘルス、13 (1)、19-26.
- 益子洋人 (2011) 過剰適応傾向の発達的变化、文学研究論集、34、137-144.
- 益子洋人 (2013) 大学生における統合的葛藤解決スキルと過剰適応との関連：過剰適応を「関係維持・対立回避の行動」と「本来感」から捉えて、教育心理学研究、61、133-145.
- 益子洋人 (2016a) 過剰適応の関係維持／対立回避行動から見たサブタイプおよび統合的葛藤解決スキルと本来感との関連、北海道教育大学紀要教育科学編、67 (1)、53-60.
- 益子洋人 (2016b) 教員養成課程に在籍する大学生の統合的葛藤解決スキルの向上を目指す心理教育プログラムの効果、2016、学校メンタルヘルス、19 (2)、142-152.
- 益子洋人 (2018) 大学生の本来感や怒りの不快感に対する「もめごと解決力」の予測力、北海道教育大学紀要教育科学編、69 (1)、57-64.
- 松田チャップマン与理子・石川利江 (2019) 職場のダイバーシティ&インクルージョン風土と従業員のウェルビーイングとの関連、桜美林論考 心理・教育学研究、10、17-29.
- 松井緑子・岩崎真和・五十嵐透子 (2017) 青年期の対人不安傾向と関連要因の検討—自己分化度と本来感および随伴性自尊感情の観点から—、上越教育大学心理教育相談研究、16、1-10.
- 松並知子 (2020) 高校生における依存的恋愛観の心理的要因およびデートDV暴力観との関連—ジェンダー差に注目して—、日本健康相談活動学会誌、15 (1)、52-57.
- 松崎学 (2012) Q-U 満足型学級集団の質の違いに関する探索的研究 (I) Q-U 満足群出現率の違いと本来感への Q-U 因子の影響、山形大学教職・教育実践研究、7、9-21.
- 松崎学 (2013) Q-U 満足型学級集団の質の違いに関する探索的研究 II：本来感に及ぼす学級機能因子の影響に関するタイプ間の違い、山形大学教職・教育実践研究、8、17-30.
- 三島知剛・林絵里・森敏明 (2011) 教育実習の実習班における実習生の居場所感と実習前後における教職意識の変容、教育心理学研究、59 (3)、306-319.
- 光岡由紀子 (2019) 看護師における本来感と感情労働と職業的アイデンティティとの関連、日本看護研究学会雑誌、42 (4)、749-761.
- 溝上慎一 (1997) 自己評価の規定因と SELF-ESTEEM との関連—個性記述的観点を考慮する方法としての外的視点・内的視点の関係—、教育心理学研究、45 (1)、62-70.
- 向日恒喜 (2019) 本来感と優越感が職場における知識提供

- 動機に与える影響、中京企業研究、41、63-73。
- 長峯聖人・外山美樹 (2019) ノスタルジアが時間的展望に与える影響—本来性を媒介要因として—、教育心理学研究、67、190-202。
- 永瀬悦子 (2018) 保育士資格取得予定学生の命の意味づけに関する研究—生死体験と母性理念、命の意味づけ、本来感に着目して、郡山女子大学紀要、54、77-87。
- 中村准子・岡田昌毅 (2016) 企業で働く人の職業生活における心理的居場所感に関する研究、産業・組織心理学研究、30 (1)、45-58。
- 中谷隆・東山隆子 (2019) 日常生活におけるフォーカシングとマインドフルネスの体験過程—その類似点と相違点—、県立広島大学保健福祉学部誌人間と科学、19 (1)、1-21。
- 西中華子 (2014) 心理学的観点および学校教育の観点から検討した小学生の居場所感：小学生の居場所感の構造と学年差および性差の検討、発達心理学研究、25 (4)、466-476。
- 野原万智子・深見俊崇 (2018) 学級雰囲気と本来感と学習意欲の関係性の検討、島根大学教育臨床総合研究、17、75-87。
- 沼田真美 (2019) 自己注目が他者へのゆるしおよび自己へのゆるしへ及ぼす影響—自尊感情の2側面を媒介として—、感情心理学研究、27 (1)、10-19。
- 織田万美子 (2018) 大学生における過去のとらえ方と現在の充実感および本来感との関連、学校メンタルヘルス、21 (2)、163-172。
- 小野田瑠璃・吉岡和子 (2014) 家庭における居場所感が思春期の子どもに与える影響—自己肯定感と友人に対する「甘え」との関係に着目して—、福岡県立大学心理臨床研究、6、75-83。
- 折笠国康 (2016a) 幼稚園教諭のベリーフが本来感に与える影響、郡山女子大学紀要、52、207-215。
- 折笠国康 (2016b) 幼稚園教諭志望の女子学生特有のベリーフが本来感に与える影響、郡山女子大学紀要、52、217-225。
- 折笠国康 (2021) 保育職従事者の本来感と勇気としての共同体感覚との関連、郡山女子大学紀要、57、41-49。
- 折笠国康・庄司一子 (2010) 中学生の本来感の検討—学級風土による違いとの関連から、共生教育学研究、4、13-22。
- 折笠国康・庄司一子 (2012) 中学生の本来感が学級適応に与える影響、教育カウンセリング研究、4 (1)、11-19。
- 折笠国康・庄司一子 (2018) 中学生の本来感の学年差と性差、郡山女子大学紀要、54、13-25。
- 折笠国康・庄司一子 (2019a) 中学生の学校ストレスが学校忌避的感情と関係性攻撃に与える影響、及び、本来感によるストレス低減効果、学級経営心理学研究、8、17-28。
- 折笠国康・庄司一子 (2019b) 中学生の本来感と優越感および学校適応感との関連の検討：本来感と随伴性自尊感情の組み合わせの視点から、発達心理学研究、30 (3)、132-141。
- 大田倫生・増田成美・上手由香 (2021) 青年期における本来感の形成要因および心理的 well-being に与える影響の検討、広島大学心理学研究、20、49-70。
- 尾崎真奈美・小林溪地・奥健夫 (2006) 健康なスピリチュアリティと純粋性：スピリチュアリティ・オーセンティシティー・フローに関する調査より (研究発表、第21回生命情報科学シンポジウム)、国際生命情報科学誌、24 (1)、165-175。
- Pyszczynski, T. & Kesebir, P. (2013) An existential perspective on the need for self-esteem. In V. Zeigler-Hill (Ed.) Self-esteem (pp. 124-144). New York: Psychology Press.
- Robins, R. W. & Trzesniewski, K. H. (2005) Self-esteem development across the lifespan. Current Direction in Psychological Science, 14 (3), 158-162.
- Rosenberg, M. (1965) Society and adolescent self-image. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 齋藤香恵子 (2010) 大学生の捉える母子関係と自尊感情、過剰適応との関係、生涯発達心理学研究、2、33-40。
- 阪無勇士・石村郁夫 (2015) 一時保護所における児童への感情労働が本来感を介してバーンアウトに及ぼす影響、東京成徳大学臨床心理学研究、15、163-168。
- 酒井久実代・川崎俊博 (2018) 振り返り日記が精神的健康に及ぼす効果の検討、関西大学臨床心理専門職大学院紀要、8、49-59。
- 佐々汐里・原田宗忠 (2018) 学校イメージと学校内での精神的健康との関係—描画を用いた検討—、愛知教育大学教育臨床総合センター紀要、8、1-10。
- 佐々木和華子・池上知子 (2016) 過剰な外的適応傾向と本来感の関係性—理想自己と義務自己の類似性に注目して—、発達人間学論叢、19、1-8。
- 清水寿代・鄭曉琳・浦上萌・清水健司・杉村伸一郎 (2014) 大学生を対象とした親性準備性尺度の作成—自尊心、自己嫌悪感、本来感との関連—、幼年教育研究年報、36、5-12。
- 白田優果 (2020) 大学生における本来感に対する影響因と心理的 well-being との関連：認知的要因と情動的要因に注目して、皇學館論叢、53 (1)、1-14。

- 相馬花恵・越川房子 (2013) 母親に対するマインドフル・ヨーガの効果検討、子育て研究、3、8-17.
- 鈴木雅治・中村真理 (2015) 大学生における自分探しに影響を及ぼす要因、東京成徳大学臨床心理学研究、15、218-223.
- 鈴木真吾・小川俊樹 (2008) 中学生における自尊心と被受容感からみたストレス反応・本来感の検討、筑波大学心理学研究、36、97-104.
- 田中沙依・下田芳幸 (2013) 中学生における友人に対する感情に関する研究—自己開示および本来感との相互影響性の検討—、富山大学人間発達科学部紀要、8 (1)、35-45.
- 寺嶋愛・吉岡和子 (2017) 母娘関係と「いい子」との関連—母親の情緒的関わり、母娘の絆と娘の安心感及び本来感に着目して—、福岡県立大学心理臨床研究、9、35-48.
- 土田弥生 (2019a) 自閉スペクトラム症リスクの高い大学生の適応要因の検討：アスリート大学生と非アスリート大学生の差異に着目して、田園調布学園大学紀要、13、191-204.
- 土田弥生 (2019b) 自閉スペクトラム症リスクの高い大学生が適応の維持を可能としている要因の検討、学校メンタルヘルス、22 (1)、101-113.
- 土田弥生 (2020) 自閉症スペクトラム傾向と心理的敏感さ、ハーディネスが適応要因に及ぼす影響、田園調布学園大学紀要、14、145-161.
- 上野淳子・赤澤淳子・松並知子・井ノ崎敦子・下村淳子 (2021) 大学生における葛藤解決方略と恋人による被支配感の関係、四天王寺大学紀要、69、53-62.
- 卜部明 (2017) 児童後期から思春期における自尊感情の発達の変化と性差、学校メンタルヘルス、20 (1)、79-84.
- 卜部明 (2020) 自尊感情の諸側面—状態自尊感情・自尊感情の安定性—、国立音楽大学研究紀要、54、1-12.
- 卜部明 (2021) 自尊感情の諸側面 II—潜在的自尊感情—、国立音楽大学研究紀要、55、7-17.
- 牛山茜 (2015) 過剰適応傾向者の本来感に影響を与える要因の検討—成功の捉え方に着目して—、山梨英和大学心理臨床センター紀要、10、34-45.
- 渡會文映 (2018) 本来感・自尊感情・精神的健康が高校生の心理的ストレス過程におよぼす影響、山形大学教職・教育実践研究、13、57-68.
- Wood, A. M., Linley, P. A., Maltby, J., Baliousis, M., & Joseph, S. (2008) The authentic personality: A theoretical and empirical conceptualization and the development of the authenticity scale. *Journal of Counseling Psychology*, 55 (3), 385-399.
- 山田恭子・吉澤寛之 (2017) 教師・保護者・友人のはたらきかけが本来感と自尊感情に及ぼす影響：心理的 well-being の向上を目指した検討、岐阜大学教育学部研究報告人文科学、66 (1)、241-250.
- 山口豊一・松崎くみ子・上村佳代 (2021) 女子大学生における援助要請行動および居場所感が青年期 QOL に与える影響、跡見学園女子大学心理学部紀要、3、43-53.
- 吉田祥子・田島司 (2010) 保育専攻学生における保育職の適性の認知に関する研究—実習の前後にみる保育職の認知の変容について、北九州市立大学文学部紀要人間関係学科、17、61-74.
- 吉成優規・石村郁夫 (2019) 過剰同調性がネガティブ感情表出と本来感に与える影響—被受容感を媒介にして—、東京成徳大学臨床心理学研究、19、20-27.
- Zeigler-Hill, V. & Myers, E. M. (2013) A review of gender differences in self-esteem. In S. P. McGeown (Ed.) *Psychology of gender differences*. (pp. 131-143). New York: Novinka.